

〔資料〕

津和野 総霊社蔵『鷲原八幡宮・大宮司福場家由緒書』翻刻〈上〉

The Yuishogaki of Washibara Hachimangu Shrine and its Guardian FUKUDA Clan, Tsuwano:
Decipherment and Annotation (1)

福田道宏*

FUKUDA Michihiro*

はじめに

島根県でも有数の観光地として知られる城下町津和野は重要伝統的建造物群保存地区（以下、重伝建と略す）にも選定された町並みを一部に残し、数多くの文化資源・観光資源、文化財が存在する。本稿では、流鏑馬神事でも知られる鷲原八幡宮に伝来し、現在同社宮司を兼帯する総霊社が所蔵している古記録『鷲原八幡宮・大宮司福場家由緒書』を翻刻紹介するものである。ここでは、翻刻を提示するに先立ち、簡単に鷲原八幡宮と当該資料の概要について触れておく。

鷲原八幡宮について

鷲原八幡宮は島根県鹿足郡津和野町鷲原に鎮座の古社で、津和野城（三本松城）跡の南西麓にある。津和野川と城跡からつづく山に挟まれた狭隘な平地にほぼ南面して山の傾斜にかかるように本殿があり、そこから南、川側に拝殿があり、その南に楼門、鳥居が並ぶ。この神社の特徴的なところは、広大な馬場が常置されることである。本殿から鳥居までの南北方向と概ね直交し、川と並行するよう、楼門と鳥居の間に東南東から西西北西に向かって一直線に伸びる馬場がある。中央

* 広島女学院大学人間生活学部生活デザイン学科教授

の土塁が馬場をふたつに分ける。この馬場でさきにも冒頭で触れた流鏑馬神事が毎年執行され、土塁に立てられた的に向かって騎射が行われる。観光の中心となる重伝建の町並みからはやや遠く、同じく少し中心から距離のある森鷗外生家や西周旧宅からも離れた位置にあるが、鎌倉時代から戦国時代までの石見国の名族で津和野の礎を築いた吉見家にゆかりの古社であり、吉見時代にさかのぼるともいう流鏑馬神事の際には多くの参詣者を集める。稿者は安野光雅美術館とのかかわりから津和野に行き始めた当初から、一度、流鏑馬を観たいと思っていたが、二〇二三年四月二日ようやく二十年越しで実現できた。

さて、本殿・拝殿・楼門の建造物三棟が重要文化財に指定されており、「国指定文化財等データベース」⁽¹⁾の詳細解説には次のように書かれている。

八幡宮は、津和野町の南部、津和野城跡の南西麓に所在する。嘉慶元年（一三八七）に石見国地頭職吉見頼直により鶴岡八幡宮から勧請され、応永十二年（一四〇五）に現在地へ遷座したと伝えられる。古くより鷲原八幡宮とも称し、現在の社殿は、天文二十三年（一五五四）の陶晴賢による津和野城攻めによる焼失後、永禄十一年（一五六八）に吉見正頼により再建された

もので、正徳元年（一七一二）に津和野城主の亀井茲親により、拝殿が建てられるなど大規模な改修が行われた。

境内は南面し、本殿、拝殿、楼門が一直線上に建ち並ぶ構成で、拝殿と楼門の間には方形の池を設けて潔斎橋を架ける。本殿は石垣上に建ち、拝殿との間を石階で繋ぐ。

八幡宮の建物のうち、本殿と楼門が昭和四十七年三月三十一日付で島根県指定有形文化財となっている。また、境内南側の全長二五〇メートルの流鏑馬馬場は昭和四十一年五月三十一日付で島根県指定史跡となっている（同四十七年七月二八日付で境内地を追加指定）。

〔略〕

八幡宮は、本殿と楼門が建築年代の明らかな永禄年間まで遡る数少ない神社建築の遺構として貴重であり、細部意匠に室町時代後期の時代的特徴をよく現しており価値が高い。また、社殿構成や翼廊をもつ楼門の形式に顕著な地方的特徴を有しており、中国地方西部における神社建築の展開を理解するうえで重要である。

つまり、重要文化財指定されている建造物三棟のうち本殿と楼門は室町時代後期（戦国時代）、拝殿は江戸時代中期の建造物で、たびたび造替されることもある神社建築としては、造営年代が明らかな建造物として評価されたものである。

現在、右の三棟は二〇二二年度から二九年度まで解体による保存修理事業が行われており、指定建造物そのものは直接観ることが出来ない。稿者は解体工事開始以前から何度か足を運んでおり、旧状を見ているが、工事前、損傷の激しい茅葺屋根部分にシートが掛けられているのを見るにつけ一日も早い何らかの保存処置が行われるよう願ってきた。今回の大胆な解体を伴う修復によってさまざまな知見が得られることが期待される。

さきの解説には書かれていないが、鎌倉時代に吉見頼行が鎌倉から氏神である鶴岡八幡宮から勧請するよりも前、一〇世紀に勧請したとする言い伝えもある。

本稿で紹介する『鷲原八幡宮・大宮司福場家由緒書』のうち第二冊となる寛政四年の『由緒書』によれば、平安時代の天曆年間（九四七～五七）、宇佐の八幡宮から勧請したのが始まりとされている。つまり、二度勧請されたことになる。平安時代に勧請した「山根六左衛門尉」なる者については不明とするほかない。しかし、そこまで遡るかはともかく吉見家の入部より前から八幡神を祀る何らかの社はあったかもしれない。そこへ、鎌倉時代後期に源頼朝の弟範頼を祖とすると称する吉見家が元寇の防備を理由に石見に入り、氏神である鶴岡八幡宮から勧請したものと合祀されるに至ったものか。

ともあれ、少なくとも鎌倉時代頃まで創建がさかのぼる古社であることは間違いない。ただし、伝来の古記録はそこまで古いものはない。次節で見ると、今回紹介する資料でも織豊期の天正年間の宛行状を引用するが、それを遡るものは引かれず、天正の宛行状も年と干支が合わないので原本から書き写したのではない。

『鷲原八幡宮・大宮司福場家由緒書』の概要

本稿で翻刻して紹介する資料だが、もともと四冊の古記録で、それぞれ表紙に「由緒書」もしくは「由緒」と題されている。また、各冊末尾に、日付とともに、表紙に記されるものと同じ、その当時の大宮司福場家当主の名が差出人として書かれ、宛所を書く。各冊の標題、末尾の差出年月日、差出人、表紙・裏表紙を除く丁数を書き出すと次のとおりである。

- | | | | | |
|-------|-------------|-------|---------|-----|
| 1 由緒書 | 寛保三年（一七四三） | 五月十七日 | 福場信濃治長 | 一一丁 |
| 2 由緒書 | 寛政四年（一七九二） | | 福場土佐守治行 | 四六丁 |
| 3 由緒 | 文政十一年（一八二八） | 八月 | 福場飛騨守美唯 | 二〇丁 |
| 4 由緒書 | 嘉永七年（一八五四） | 四月 | 福場出羽介広測 | 三四丁 |

袋綴じにして紙縫りで仮綴じとしたものを、現状では四冊とも元の穴とは別に中央部に二穴をあけて、さらにボール紙で背表紙とおもてうらの表紙をつけ、綴

り紐で合冊にしている。背表紙・表紙には「古文書八幡宮由緒書」と墨書する。本稿で紹介するにあたり、むやみに新しい標題をつけるのはためらわれ、どうすべきか考えたが、これら四冊に共通する内容を表わすものとしたほうが、のちにわかりやすいと判断し、「由緒書」の標題を残しつつ、新たに当社の名と、代々その大宮司を務めてきた福場家の名を冠することにした。

というのも、本資料の四冊に共通する内容は、標題のとおり当社の創建以来の由緒を記すと同時に、近世を通じて当社大宮司の職にあった福場家の歴代の由緒と正統性を詳らかにしようとするものだからである。なお、さきに述べたとおり、各冊の巻末は福場家当主の名とともに、宛所がある。1は日比仁兵衛、2は片寄角右衛門、3は増野一馬、4は小野寺藤兵衛であり、1から3の名は寺社奉行である。『津和野町史』第三巻所載の表「町奉行・町年寄、任免表」⁽²⁾は町方の行政を行う町奉行の名を年代を追ってまとめられているが、そこに三人の名があり、各冊の差出年月はそれぞれの在任期間内である。詳しくは翻刻と、その注にまとめた。4の小野寺藤兵衛は右の表に見えないが、『由緒書』差出年の嘉永七年（一八五四）は表の最末行で町年寄の任免のみ書かれ、増野一馬が文政八年（一八二五）九月に任じられて以降、このとしまで二十九年間という在任期間はひとりが務めるにはやや長いようにも思えるので、この間のいずれかの年に彼が任じられたものかもしれない。

『鷲原八幡宮・大宮司福場家由緒書』成立の契機とその内容

ともあれ、四冊中三冊は確実に寺社奉行に提出されたもの（の控え）であり、第一冊の冒頭に「御尋ニ付書出」とあるように、寺社奉行からの下問に応えて、由緒をまとめたものである。この寛文五年（一六六五）の「御尋」の具体的内容はわからないが、第一冊の差出年月日は、さきにみたとおり、寛保三年（一七四三）五月十七日であり、寛文五年の「御尋」への回答にしては七十八年後は遅すぎるので、恐らく、この四冊に先行する由緒書が作成され、提出されたが、

現存しないということだろう。

さて、この寛文五年に着目すると、第二冊に次のような記述がある（福場家九代治重の条）。

一、寛文五年、祇園社大宮司桑原宮内（此方両社大宮司之家筋^二御座候由、

此旨、御開届被下候ハ、上京仕、吉田表江申出、八幡宮神事指図仕度申出候^ニ付、委細申上候様^ニ被仰付、吉見家以来寛永四年迄之趣、書付差上候処、御聴届在之、其分^三相済申候書付扣処持仕候、

同年、祇園社（現弥栄神社）大宮司の桑原宮内が、桑原家こそが両社（八幡宮と祇園社）大宮司の家筋だと主張し、藩内で認められれば京都で、神社・神職の家元ともいえる吉田家にも申し出たいと言っているので、「委細」申し上げるようにと命じられて、吉見家の時代から寛永四年（一六二七）までのことを記した「書付」を差し出し、聞き届けられて（こちらの言い分が認められて）話が済んだ、という。

引用の直前には、書付にここまで記したとする、寛永四年の同じく桑原家と福場家との争論の経緯も書かれている。詳しくは翻刻を参照されたいが、実は両家の（あるいは両社の）争論は、このまえにもあとも度々再燃し、第二冊も寛政三年（一七九一）に持ち上がった争論が直接のきっかけで提出されたものと考えられる。福場家の言い分では、寛永の争論は

① 室町時代、祇園社が勧請された際に神主がいなかったので福場家先祖が十年ほど祭事を行った

② その後、桑原式部が神主となったが、その没後、神主不在となったので八幡宮杜家のひとり三浦此面が慶長十六年（一六一一）神主となり、桑原大和秀治と改名した。

③ 寛永四年に当時の当主福場左衛門治重が京都に上り吉田家に八幡宮大宮司の裁許状をもらったが、桑原秀治は「大宮司」を名乗るのは祇園神主に限ると主張して争論となった。

④ 藩内での吟味のなかで福場治重が福場家の家筋について詳しく説明し、福場家の言い分に相違はなく、吉田家にもそれを伝達し、福場家が八幡宮大宮司であると認められた。

というものである。以後、宮廷からの叙位任官と、藩内の神職のなかでの席次との関係などでたびたび諍いがあり、寛政の争論までのおおむね最終的に福場家の主張が認められる形となっている。

これについて『津和野町史』第一巻の第三節にあたる祇園社の「2造営・社領・杜家」では、弥栄神社桑原家伝来の資料をもとに、室町時代、祇園社の

再勧請と同時に鷲原八幡宮大宮司であった吉松八郎左衛門基秀が、祇園社の大宮司を兼ねることになり、いわゆる「両社大宮司職」が始まったことは事実であろう。

と述べ、この吉松家の基秀・秀次父子が天文十三年（一五四四）八幡宮祭礼の盃の順番をめぐる、同社別当との争論からの刃傷に及んで死んで、家が絶えたため、同年十二月十二日、以後の両社大宮司職桑原治部左衛門尉菅原秀次となり、弘治三年（一五五七）八月、岸見又左衛門尉秀安となり、さらに元龜三年（一五七二）二月、再び桑原姓を称して以後現在にいたっている。

と桑原家先祖が両社大宮司職にあったと記す。⁽³⁾ここに現われる吉松基秀・秀義父子も桑原秀次・（岸見）秀安も福場家の由緒には登場せず、その内容は完全に食い違っていることになる。これを両立させるとすれば、たとえば大宮司職が一家に相伝のものではなく、複数の杜家から交替で出るものだったが、福場家の由緒が他家の者を歴代から省いているということはあるかもしれない。

ともあれ、以後の各冊も八幡宮と大宮司福場家歴代の事績、兼帯するほかの神社の社務と祭礼日、社領といった内容であり、寺社奉行がこの由緒書をもとに吟味したのは、当社の杜格および宮司の藩内での位置づけだろう。桑原家との主張は平行線をたどり、どちらが正統か、あるいは偽りがあるかはには決しがたい。また、どちらかが正しいという性質の問題でもないかもしれない。いずれ、

桑原家や、近代以降、他社に勤仕することになった福場家子孫など、ほかの史料がないかも調査を行いたい。

ただ、ひとつ言えることは、藩内の神職の席次において、福場家が優先されることが多く、それがたびたび確認され、第三冊において、それまで叙位任官の有無にかかわらず福場家が上座とされてきたのが、叙任年月順と改められたほかは定着・固定していったことである。結果、第四冊では桑原家をはじめ杜家間での、席次や格付けをめぐる争論は記されない。

次節で述べるが、今回掲載する翻刻は右のうち第一冊・第二冊である。ここまでに触れることのできなかった諸点については、今回の解題に譲りたい。

『鷲原八幡宮・大宮司福場家由緒書』の翻刻について

ここまで第一冊・第二冊を中心にその概要と一部内容について検討し、成立の契機についても触れたが、紙数の都合で本稿は上・下二回に分けて掲載することにした。すなわち、四冊のうち年代順に二冊ずつを翻刻で紹介する。

本資料とは別に、ボール紙の表紙をつけて同体裁とした『八幡宮古文書解説』（背表紙には「鷲原天光山一本松八幡宮古文書下シ」）が総霊社に所蔵されており、コクヨ製の四〇〇字詰原稿用紙に本資料を手書きで翻刻したものである。原資料の体裁を改行、改ページなどそのままに書写されている。原資料の第一冊の表紙裏にあたる部分に別紙を貼り込んで手書きの凡例があり、そこにある「河野晃」が、この『八幡宮古文書解説』の筆者だろう。原資料を現状のように改装したのも、この翻刻の際かもしれない。ただし、本資料は管見の限り、翻刻して公刊されたことはないようである。ただ、『津和野町史』第一巻の第三部Ⅻ章の第三節にあたる鷲原八幡宮の「1勧請」「4社領」の項などで第一冊が部分的に翻刻引用されているのみである。⁽⁴⁾同書では引用元を「御尋二付書出」「寛文五年差出由緒書控」などと呼んでいるが、おそらく本資料か、その写しに拠ったものだろう。

今回、改めて翻刻するにあたり、本資料の原本を読んで翻刻したうえで、河野

晃による手稿本「八幡宮古文書解説」との校合を行った。本稿では、出来る限り、原資料の体裁をそこなわないう心掛けつつ、読み易さも考えて、一部、改めた点がある。まず、改行・改ページは原資料に拠らなかった。また、原資料では一つ書きの行頭がそろっていても、引用や注記も含まれるなどして、どこからどこまでがひとつの内容かわかりづらい部分もあるため、一部、行頭の位置を下げるなどして読み易さを優先した。なお、原資料の欠字・平出・台頭などの体裁は出来る限り、原資料のままとするよう努めた。その他の表記に関しては翻刻の凡例に記すことにする。

解題注

- (1) 文化庁ホームページ「国指定文化財等データベース」所載の「八幡宮」によれば、指定基準「流派的又は地方的特色において顕著なもの」にあたるものとして二〇一一年十一月二十九日に指定された (<https://kunshitei.bunka.go.jp/heritage/detail/102/00004347>)。
- (2) 『津和野町史』第三卷（一九八九年二月、津和野町史刊行会、三〇八頁）。
- (3) 『津和野町史』第一卷（一九七〇年八月、津和野町史刊行会、七一六頁）。
- (4) 『津和野町史』第一卷（一九七〇年八月、津和野町史刊行会、六八五・六九二・九三頁）。

謝辞

資料の調査・撮影について快くご許可くださいました鷲原八幡宮・総霊社宅野裕司宮司に心より御礼申し上げます。また、宅野宮司をご紹介くださった津和野町安野光雅美術館 青木貴志副館長にも感謝申し上げます。なお、本稿は科学研究費「近世宮廷絵師の地方展開、およびそこにみる画壇構造の解明に向けた基礎研究」（基盤B、JSPS科研費JP20H01211）の成果の一部を公開するものです。

翻刻：総霊社蔵『鷲原八幡宮・大宮司福場家由緒書』

【凡例】

- 一、本文中、常用漢字のあるものはこれを使用し、変体仮名は正字に改めた。ただし、助詞として用いられる江（え）・者（は）・茂（も）・与（と）・而（て）は旧字を存した。
- 一、本文には、読点および並列点を補った。
- 一、翻刻中、「」内は翻刻者の補注である。

【翻刻】総霊社蔵『鷲原八幡宮・大宮司福場家由緒書』翻刻

「ボール紙外表紙」

古文書

八幡宮由緒書

「ボール紙背表紙」

古文書八幡宮由緒書

「第一冊 原表紙」

御城廻り組

由緒書

上領一本松大宮司

福場信濃

〔本文〕

寛文五年御尋^二付書出^一

一、当社八幡宮之儀ハ吉見三河守頼行公^{〔石見吉家祖一二八、年能登から下間か、一二三〇九〕}御代、鎌倉氏八幡宮之御幣御勧請、嘉慶元年卯之二月廿四日、津和野三本松之城^{〔頼行の次、南北朝時代〕}吉見頼直^{〔二〕}御勧請と申伝候、

大宮司福場千十郎治家

大宮司福場八太夫治光

頼行公御代此者二代相勤申候、

一、吉見信濃守様^{〔後出の額祥か、委細不明〕}〔三〕、永禄十卯之年六月^{〔二五六七〕}八幡之御社御建立、

大宮司福場弥九郎治興

大宮司福場左右衛門大夫重吉

此者二代相勤申候、

一、広頼公^{〔吉見広頼一二五四、一六三三〕}御代^{〔四〕} 大宮司福場右近太夫治次

右ハ此御代福場右近太夫へ御社領足地廿石被下置候、右之御打渡所持仕候、

御打渡如左之、

為鷺原八幡宮寄進廿石足之事、全令領地神内掃除等之儀、堅固^二可遂^一、

其節之状如件、

〔二五七六、丁丑は天正五年〕
天正四丁丑年八月十五日

〔吉見〕
広頼 御判

福場右近太夫とのへ

同吉山近江守様^{〔五〕} 御代為御加増足地五石被下置候、右之御打渡所持仕候、御打渡如左之御判

持詰五石足之事、被宛遣之条、令相拘之諸公役堅固遂、其節^并於神前可抽懇祈之由被仰出候也、依^而打渡之状如文、

〔吉山か〕
吉見近江守 奉
慶長三年三月廿四日

福場右近太夫とのへ

此時之御打渡所持仕候、

大宮司福場左京進治行

此者、後ハ民部と名改申候、名乗も治次と改申候、

大宮司福場刑部太夫重次

此形部^{〔刑部〕}太夫と申ハ民部弟^二而^一 御座候、中年之比、

長門高佐村^{〔阿武郡高佐郷、現津市高佐上、高佐下〕}〔六〕と申へ帰申候節、病死仕申候、此高

佐村と申^者当社之御社領地^三而^二 御座候、年貢払申候時之手形杯

も所持仕申候、

一、亀井豊前守様^{〔政矩初代一五九〇、一六六九〕}〔七〕 御入部之時、左京在方之社人四拾三人召連罷出候扣御

座候、年暦之儀ハ知レ不申候、

一、亀井隱岐守様^{〔慈親三代一六九一、一七三二〕}〔八〕 御入部之時、在方社人八人罷出申候扣御座候、年暦之

儀ハ右同断、

一、亀井隱岐守様御代

御造宮之事

正徳元辛卯之年、御再興被遊候、

一、源茲親公御代、其節之別当真葉法印・大宮司福場左京重長奉事仕候、

大宮司福場信濃治長

一、同正徳六丙申之年三月十九日、別当幸栄寺^{〔九〕}・福場信濃、右兩人へ御社領

被下置候、御打渡如左之

石州鹿足郡鷺原村八幡宮社領之事、

高拾石内	五石	別当	幸栄寺
	五石	大宮司	福場信濃

但五ツ成

右八幡宮社領無之付、今度新規令寄付畢、

於神前可抽国家安全祈禱丹誠者也、

從五位下亀井隱岐守

正徳六丙申年三月十九日

源茲親^{御判}

別当幸栄寺^江

大宮司福場信濃^江

右之御打渡、別当幸栄寺へ御渡被遊候、私方^二ハ御打渡之写仕置申候、寺社奉行ハ大橋安兵衛殿^{〔10〕} 御役之時節^{二而} 御座候、

大宮司福場左京重長

大宮司福場信濃治長

嘉慶元年持掛り八幡七社之事

一、横瀬村^{〔11〕} 八幡宮、御祭礼八月十八日より十九日へ執行仕候、御勸請之儀ハ知レ不申候、

一、高野村^{〔12〕} 八幡宮、御祭礼九月十五日より十六日へ執行仕候、御勸請之儀ハ右同断、

一、市尾村^{〔13〕} 八王子社、御祭礼ハ九月十四日より十五日へ執行仕候、御勸請之儀ハ右同断、

一、福川村^{〔14〕} 新ヶ原八幡宮、^{当社八幡七社之内二而御座候故書附申候、}

一、神田村^{〔15〕} 荒人大明神、^{〔荒神カ〕 此社此祭 御幣計納置申候、}

一、瀬戸^{〔16〕} 石神、 右同断、

一、原八幡宮、^{御社所知レ不申候、扣二ハ御座候、}

右^者七城之御鎮守と申伝候、

鷺原八幡宮神田之事

高佐村^{〔17〕} 牛王神田 四反三畝、現米四石貳斗

高田村^{〔18〕}・神田村 高五拾七石米

右之田地、出^{〔坂崎直盛 津和野藩主、一六六六〕} 羽^{〔六六六〕} 守^{〔六六六〕} 様^{〔19〕} 御代御取上ケ被遊候、

持掛り田地之事

長 三拾九間

横 貳拾八間

高 貳石

現米六計

茲親公様御代、年貢御免被遊候

八幡宮七社之外之社之事

一、源茲親公之御代、天和二壬戌年、^{〔武家ノ家老、一六九五〕} 多胡主水殿^{〔20〕 二而}

恒産明神之社御建立被遊候、御勸請之御縁起^者萩原左右衛門佐員從^{〔公卿、一六四五〕一七二〇〕} 之御手跡、夷之御縁起ハ^{〔安儀書案、一六五〇〕一七二三〕} 佐々木万治郎^{〔22〕} 手跡^{二而} 御座候、御祭礼之儀ハ極月

十九日^二執行仕候、同近所之氏子四月之二日合三日へ御祭礼執行仕候、其後

貞享元年甲子之五月^{〔六八四〕} 茲親公為御寄進、額御神納日遊候御手跡ハ輪王子^{〔寺〕}

二品守全親王^{〔輪王寺天皇法皇、一六四九一六五〇〕} 之御手跡^{二而} 御座候、

一、源茲親公之御代、^{〔前田、家老〕} 多胡真武^{〔24〕}、天光山^二天神宮之御社御建立被遊候筈^二御座候、其後元禄八乙亥年、福場左京^二御預ケ被遊、^{〔真儀カ、家老、貞享、一六六七〕一七二七〕} 多胡外記^殿御参

宮度々御座候、御縁起之儀ハ正三位菅原長義公之御手跡、額ハ^{〔長途カ、公卿、一六四七〕一七二二〕} 東坊城大納言殿・高辻大納言殿、^{〔豊長カ、公卿、一六二五〕一七〇二〕} 右両人之内御調被遊候筈^{二而} 御座候、

一、鷺原荒神、御勸請知レ不申候、

一、中座高崎^{〔25〕} 八王子社、右同断、

一、同 半牛夷之社一ヶ所、右同断

一、野中村^{〔26〕} 河内大明神、右同断、御祭礼之儀ハ九月六日合七日へ執行仕来候得共、近年下山^{〔27〕} 御祭礼^二差合申候^二付九月二日合三日へ執行仕候、

一、西谷村^{〔28〕} 河内大明神、同年曆之儀ハ知レ不申候、御祭礼之儀ハ九月十三日合十四日へ執行仕候、

裁許状取候社人之事

一、寛永四丁卯年七月廿四日、福場左衛門太夫裁許状頂戴仕候、

一、寛文元辛丑之年七月廿五日、福場左京進裁許状頂戴仕候、

- 一、貞享^{〔六八五〕}二乙丑之年七月廿五日、福場主膳裁許狀頂戴仕候、
一、宝永^{〔七〇〕}七庚子之年九月六日、福場信濃裁許狀頂戴仕候、
一、元文^{〔七三九〕}四年七月十一日、福場筑後裁許狀頂戴仕候、

右之通^二御座候、其外先祖之裁許狀ハ焼失仕申候、以上、

寛保^{〔七四三〕}三亥年五月十七日 大宮司

福場信濃治長

日比仁兵衛殿^{〔二九〕}

〔第二冊 原表紙〕

寛政

由緒書

上領一本松 大宮司

福場土佐守

〔本文〕

上領鷲原八幡宮大宮司

福場土佐守由緒

鹿足郡鷲原一本松

一、八幡宮社司

始祖

鈴木佐太郎

産国・諱不審

右御社、天曆^{〔九四七〕}年中、山根六左衛門尉^{〔五七〕}申士、宇佐 八幡宮を潜奉勸請、当

山城^{〔當時御山〕}一本松尾^{〔當時称宮尾〕}に小社を造営し、鈴木佐太郎をして社司仕を候由申伝

候、右佐太郎が二十六代社司相続仕ル由伝承り候、伝記等^者無御座候、
鷲原一本松

一、八幡宮大宮司 中興初代 福場千十郎治家

石州津和野生、鈴木千十郎、有故号福場^与相改、姓藤原氏、
従是代々相用ヒ来ル、

右御社^者吉見^{〔前出、石見吉見家祖〕}參河守源頼行殿、当国御入部之節、鎌倉鶴ヶ岡若宮

八幡宮御幣御勸請、御入部有之、御家嫡大蔵太輔頼直殿、津和野三本松之^{〔前出頼直の大南無頼直代〕}

城御引移之節、嘉慶元年丁卯二月、一本松之社地六町南之方、当時之御^{〔二八七〕}

社地^江御造営、右宇佐が勸請之一本松之御神体も御一所御鎮座、大社と

相成、社領現米貳拾石御寄付有之候、

一、津和野産 二代 福場八太夫治光

千十郎社子、

一、同産 三代 福場弥九郎治興

八太夫社子、

一、同産 四代 福場左衛門太夫治茂

弥九郎社子、

一、同産 五代 福場左京進治行^{〔五八〕}

左衛門太夫社子、

一、同産 六代 福場^{〔刑部〕}刑部太夫重次

左京進社子、

一、同産 七代 福場左衛門太夫重治

形部太夫社子、始号弥九郎、後改左衛門太夫、

一、永祿^{〔五六八〕}十一年戊辰八月、吉見^{〔前出、一五三〕}大蔵太輔正頼殿^{〔五八〕}、八幡宮御再建、造営

奉行吉見信濃入道頼祥・大宮司福場弥九郎重治・別当快純法印棟札有

之、此節、長州高佐田方三反三畝歩米三石四斗三升、於鷲原、左衛門

太夫屋敷地被下候証書有、

一、同産

八代

福場右近太夫治次

左衛門大夫社子、

一、天正四年丁丑八月十五日、吉見三河守広頼殿、式拾石社領御寄付有

之、広頼殿御寄進状有、

一、慶長三年戊戌三月廿四日、吉見家分社領五石御寄付有之、吉山近江守

奉之寄付状有、

一、慶長五年、坂崎出羽守殿〔31〕御入部之節、右往古分之御社領悉被召上

候所、御当杜之儀各別ヲ以、現米三石宛被相渡候書物有、御裁許状

頂戴之、

一、同産

九代

福場左衛門太夫治重

右近太夫社子、始民部

一、元和三年、從因州

豊前守公当国御入部之節、当御領之社家四拾三人召連、

御出迎仕候、其後左衛門太夫儀於御屋敷御目見被仰付、鳥目式

貫文被下置候、夫今年始御札守・御洗米差上、御札申上候、江戸御上

下之節御迎送罷出申候、毎度鳥目式貫文宛被下置候、

一、御社領之儀坂崎家之通、毎年現米三石宛被下置候、

一、去ル享祿元戊子九月、吉見三河守広頼殿〔32〕祇園社〔33〕御勸請有之、

神主無之付、十ヶ年計りも福場家預り祭事執行仕候、其後桑原式部

太夫、祇園神主被仰付、同式右衛門迄相動候処、式右衛門相果、神

主無之付八幡宮下社人三浦左近太夫申者、慶長十六年神主相成、

祇園専諫職桑原大和秀治与相改申候、然ル所寛永四年卯七月、左衛門

太夫治重上京仕、於

神祇管御本所吉田表〔34〕鷺原一本松八幡宮大宮司之許状執下候所、桑

原大

和分大宮司号之儀祇園神主分、御裁許状不相成申出二付、及爭

論、達

御聴、段々御吟味之上、私家筋之儀委申上御断、私方申分相違無御座

候二付、左衛門太夫致上京、於

御本所吉田表相違無之趣申上候様被仰付、則塩屋内匠殿・湯木工

殿〔35〕分左衛門太夫御書被下、猶又從御両士、京都金山紹益〔36〕江

吉田表執計之儀以御状被仰遣、左衛門太夫上京仕、於吉田表猶又往

古分之儀委細申上候所、被為聞召、大宮司号相違無之段重被仰渡、

吉田御役人鈴鹿左京殿・鈴鹿采女殿〔37〕分金山紹益書状を以、右之

趣意被仰遣、紹益分内匠殿・李殿返書を以、右之様子申上候所、左

衛門太夫罷帰候上、申分逐一相立候二付、其段吉田表御役人中申達候

様被仰渡、鈴鹿左京殿・鈴鹿采女殿其段申達候得返書桑原大和

秀治分吉田表差出候目安書本書三通、於御当地御役人申達、高聞候

様、御返翰差添被下候、右返書内匠殿・木工殿御状、紹益返事、吉

田表御役人中分紹益之返状、為後証被下置、桑原大和目安書共々彼

是八通、示令所持仕候、前々之通八幡宮大宮司、聊相違無御座候、

一、寛文五年、祇園社大宮司桑原宮内分此方両社大宮司之家筋御座候

由、此旨、御聞届被下候ハ、上京仕、吉田表申出、八幡宮神事指図

仕度申出候二付、委細申上候様被仰付、吉見家以來寛永四年迄之趣、

書付差上候処、

御聴届在之、其分相済申候書付扣処持仕候、

一、同産 御裁許状頂戴之 十代 福場左京進治次

左衛門大夫社子、後民部与改、

一、天和二年壬戌十二月、恒産神主被仰付候、御勸請由来、別申上候、

一、貞享三年寅七月晦日、

能登守公〔38〕御入部之節、社領有之社家八人御迎罷出候、同八月八日左

京進

計御目見被仰付、御杯頂戴被

仰付、鳥目二貫文被下置候、尤御久米供御^并扇子ハ相差上申候、

一、同産

御裁許狀頂戴之 十一代

福場主膳重長

左京進社子、後將監、又左京^与改、

一、^{〔六九五〕}元禄八年乙亥、天満宮^{天光山}

御勸請有之、主膳神主ヲ被

仰付候、委別に申上候、

一、同産

御裁許狀頂戴之 十一代

福場信濃治長

主膳社子、改名近江、

一、^{〔七二六〕}元禄十五年壬午、屋廻^年壹反三畝廿七步引石^二被 仰付候、

一、^{〔七二六〕}正徳六丙申年、

隱岐守公御代、御社領高拾石被遊

御寄付、別当幸榮寺・大宮司福場信濃^江被為当

御打渡被下置候、尤御判物、幸榮寺預り、

一、同産

御裁許狀頂戴之 十三代

福場市正治裏

信濃嫡子、始筑後守治家^与、其後任官 御裁許狀被下、任

官之節、

御綸旨頂戴、土佐守受領、其後改市正、

一、^{〔七五五〕}宝曆五年亥六月、祇園大宮司桑原清女^二座席之儀^二付、新規之儀申聞

及爭論、達 御聴候得共、不相片付候内、同七年丑春、清女致上京、

六位若狭守昇進仕候^{〔39〕}、其御御触書筆頭^二被差出候故、古来^二私家

筋筆頭之儀申上候得^者、当分若狭守儀^者 別触有之候、未爭論不相片付候

得共、筑後守儀六位任官之儀御願申上御聞届、例之通寺社奉行所^二御

添簡被下、同八年寅六月上京、吉田表御取沙汰、正六位土佐守昇進仕

候^{〔40〕}、尤、伝

奏之儀^者 武家伝奏家^二而 任官仕候、同九年卯六月五日、右及爭論候席之儀^二付寺社奉行日比仁兵衛殿被仰渡候趣、左之通、

鷺原八幡之儀^者 古来^二社頭之儀、其方家古来^二社家筆頭^二而有之^二

付、官位之前後不被成御構、自今以御領法、社家管頭^二被仰付、

御目見等も右之通被為受候段被 仰渡有之、福場家上座可仕旨相

究申候、尤社家中御奉行所^江被招呼、右之趣被仰渡、着席之図^并一

札被成御取沙汰、社家中^茂右相達無之段、三浦丹後・佐伯采女・

森原中證・佐伯齋宮^二土佐守^并家嫡志津江^江卯六月五日書付相渡

候、其後、宝曆十庚辰九月廿六日寺社奉行所^二而被仰渡候^者、先達

而被 仰付候、其方座席之儀為後証定席之証文被成御渡之由被 仰

聞、御証文被下候、左之通、

定席証文

宝曆九乙卯年六月五日、寺社奉行日比仁兵衛^{〔41〕} 於宅申渡

候、古格之通^二勿論被仰付候間、其旨可相心得候、尤後年為

念定席相定候趣左^二書記、双方^江相渡候様、御年寄中被仰付候

間、御領法之古格可相守候、

一、福場土佐守・桑原若狭守定席之儀、近年猥^二相成候、向

後古来之通ヲ以、御領法社頭八幡宮之社格^二被对官位之

高下^二無御構、縦雖無官福場家上席^二被 仰付候^二付、此

已後爭論有之間敷候、為後代一札相渡置候間、其旨可相

心得候、尤諸役所記録^二も扣置候様被仰付、相達置候間、

此後双方及爭論間敷候もの也、仍^而如件、

宝曆十庚辰年

九月廿六日

福場土佐守殿

牧村四郎次^{〔42〕} 判

右御書付被下置候、

一、宝曆六年寅正月、幸榮寺焼失之節、^{〔七二〕}正徳年中、八幡宮社領御寄付御打渡焼失仕候^{〔七三〕}付、宝曆十二壬午年、

能登守公^{〔龜井貞七代〕七三九一八四}改、御打渡被下置候、別当幸榮寺・大宮司福場土佐守

江、御当被下置候、此分幸榮寺預、

一、宝曆十四年申七月、依願

御大紋拝領被 仰付候、

一、八幡宮御殿神前鍵之儀^{〔六六九〕}往古々別当・大宮司両方預り^{〔七六四〕}銘々入用之節取揃候所、明和六年丑十一月廿三日、引移執行^{〔七六四〕}付、幸榮寺へ鍵受取^{〔七六四〕}遣候處、何用有之候哉^{〔七六四〕}之返答^{〔七六四〕}付、及直談候處、御上御祈禱之外、其

方祈禱^{〔七六四〕}得遣シ不申由被申^{〔七六四〕}付、是迄之趣申達候得共、承引無之、不得止可及出訴之旨、幸榮寺隱居智觀法印へ申承候得ハ、以前之通^{〔七六四〕}無之^{〔七六四〕}不相濟儀、手前々当住へ可申聞候間、出訴之儀暫差扣呉候様^{〔七六四〕}之事^{〔七六四〕}付、翌春迄延引候得共、相分不申、三月^{〔七六四〕}至可申出候所、桑原若狹

守取扱可申候由^{〔七六四〕}、数日相立候^{〔七六四〕}相片付不申、無廻三月十九日書付寺社奉行所^{〔七六四〕}差出候所、又若狹守取扱可申之由申聞候得共、此内落着

不仕儀被捨^{〔七六四〕}候様相断候、然共少々趣^{〔七六四〕}有之由申^{〔七六四〕}付、無廻任其意候處、同廿三日前々之通致落着、鍵之儀^{〔七六四〕}双方取合、勝手次第^{〔七六四〕}可仕旨、幸榮

寺被申之趣從若狹守被申聞、内濟仕候^{〔七六四〕}付、御役所^{〔七六四〕}差出候書付願下ケ、相片付申候、

一、安永三年年、淡島大明神^{〔七七四〕}

御勸請^{〔七七四〕}付、市正儀紀州^{〔七七四〕}被遣、御勸請

相濟、於城州伏見駅

御拝礼御座候、其節、市正儀於伏見御 目見被仰付、御目錄頂戴仕候、御鎮座之上、市正社司被仰付候、紀州罷越候節、御初穂雜用銀被

成御渡候、委記別^{〔七七四〕}書出申候、

一、同八月、從

能登守矩貞公^{〔前出、龜井貞七代〕} 御上下拝領被 仰付候、

一、同九子年正月五日、御大紋拝領被 仰付候、尤御祈禱等出精仕^{〔七六四〕}付被

下置之由被仰付候、同日、林十郎右衛門殿々淡島大明神月次御神供

御頂戴被遊候度 思召候間、毎月朔日差上候様被仰渡候、

一、天明二年壬寅十月三日、市正儀願之通^{〔七六四〕}隱居被 仰付、土佐守治行、

家繼被 仰付候、

一、同三年癸卯八月、

御入部之節、市正儀奉願

御目見被 仰付、其以來每年始、御礼被為 受候、尤三浦此面次席^{〔七六四〕}

罷出候、御献上之儀^{〔七六四〕}当人同様差上候、

一、天明七年十月、市正儀相果候所、同十二月廿九日、土佐守寺社奉行所

江被招呼被仰渡候者、市正儀勤功^{〔七六四〕}付銀十五枚被下置候、尤存生^{〔七六四〕}候

ハ、御思召も有之候之由被仰渡候、

御裁許狀頂戴之^{〔七六四〕} 十四代 福場土佐守治行

一、同産

市正嫡子、始志津江、又改庫之介、

其節任官、

一、安永二癸巳年上京、繼目仕、正六位土佐守任 官^{〔七六四〕}、尤伝奏之儀^{〔七六四〕}

武家伝奏御家^{〔七六四〕}御座候、罷歸候上、同年十二月年始 御礼之儀願出候

處、翌三年午ノ年始御礼被為受候、嫡子席之儀思召有之^{〔七六四〕}付、桑原若

狹守事績^{〔七六四〕}被 仰付候、相続キ毎年始 御礼申上候、并

御參勤 御送迎罷出候、

一、寛政元己酉年三月廿四日、寺社奉行所^{〔七六四〕}被招呼、牧村四郎兵衛殿^{〔七六四〕}

被

仰聞候者、桑原若狹守^{〔七六四〕}佐伯勘ケ由ヲ以申出候者、去年三浦此面、桑原直之介席之儀相濟候上、被仰渡候者、此面次席土佐守嫡子權之介、其

次席^江私躬直之介^与被仰候^者、其節^者差扣不申上候得共、若狭守嫡子直之介儀^者祇園大宮司之御許狀致頂戴候身分^二御座候^一、土佐守嫡子權之介儀^者未御裁許狀も不致頂戴事^二候得^者、吉田表^江対候^而權之介次^江直之介差出候事不相成段申出候、是又尤之事^二候間、何分權之介御許狀被致頂戴候迄^者御靈社御祭礼^江被差出候事、被致用捨可宜存候、其内御裁許狀頂戴之上、被差出候得^者、直之介^上席相成可申之趣被仰聞候^二付、私^上申上候^者、其段驚入候儀^二御座候^一、若狭守左様之儀可申出様無之、猶又勘解由杯左様之儀御役所^江申上候筈無御座候、去ル宝曆年中亡父市正与若狭守席論有之候處、社頭^江被為対古格之通、私家代々上席被仰付、其亡父四郎次殿御役中、私家之儀官位之高下^二無御構、縦雖無官以御領法福場家上席之由定席御証文被下置、^并惣社家中^茂私家先年^上席之段連判を以書付、私父子^江渡置候儀、勘解由存候儀^二候、尤其節勘解由本人^二而^ハ無御座候得共、神役盛^二相勤、委細存候事^二候得^者、兩人其々、ケ様之儀申上候儀、甚以不届千万^与申上候得^者、右定席証文者本人之事、嫡子之事^二而^者無之と被仰候故、又申上候^者嫡子之儀^者親之格式^二席並仕候もの^与奉存候由申上候得^者、未御目見も不被致、御用^二も御遣不被成中^者、御家中^二も定之嫡子席^者無之^与被仰候、又私^上申上候^者、左様被仰聞候^而社家之儀^者急度御家中之並^二も相成不申す候、社家^者烏帽子着用、御社^江罷出候^而御上^二御武運長久・国家安全之御祈祷仕候儀、御家中方々御奉公^二被召出候も同家之事^二御座候外^二御上^江御奉公と申儀^者不仕候得共、何分御定席御証文之通、福場家無官^二而^茂上席之儀^二御座候得^者、御許狀頂戴不致候共、嫡子^者嫡子之上席被仰付不被下候^而者、先年考市正^江被下置候御証文^江奉対候^而も不相済儀^与奉存候、御許狀頂戴無之^而者權之介得^不得^不仕事^二相成候得^者、御証文^二者福場家無官^二而^茂上席^与被仰付候御証文^者用^二立不申候様^二被相考候、既^二明

日^上御靈社御祭礼間^二合候様御差図相成不申候ハ、先、明日權之介差出候儀延引可仕候、自然爭論出来仕候得^者御祭事之障相成可申、其段恐入候由申上候得^者、何分^茂延引可然^与被仰候、申上度懇意も御座候得共、及深更候故罷帰候、同四月二日御役所へ罷出、申上候^者先達^而御靈社御祭礼之節、權之介不罷出候得共、以来^者御靈社^者勿論諸社御祭礼召連、勤事見習不致候^而者相成不申候間、左様之思召可被下段申上候所、以来^者御靈社其外^江も勝手次第可被召連^与被仰聞候^二付、左様も御座候ハ、座席之儀^者權之介次^二直之介列席勿論之儀^与奉存候段申上候得^者、其通可然候、先達^而被申聞候上、勘解由招呼、直之介儀御許狀致頂戴候^而も權之介^上次席^二而^{無之}相済不申段申渡候間、此後^者何れ^江被致出候儀も右之通上席權之介次直之介被出候事^与被仰聞候、又私^上申上候^者、左候ハ、拙社嫡子之節、御靈社出勤之御触書、先格之通可被下様^二申上候得^者御聴届被下、其以来^者触書權之介儀直之介^上筆頭^二被仰付候、^{〔七九〕}寛政三年辛亥三月廿四日於寺社奉行所牧村四郎兵衛殿・日比仁兵衛殿^{〔四六〕}被仰聞候^者、桑原若狭守より仁兵衛迄申出候^者、若狭守家^者八幡・祇園両社大宮司之家柄^二而^者御座候得^者、福場家土佐守迄^者先へ出し候得共、其後^者左様相成不申候歟、御当地此内^上度々申上候得共、御役中御頓着不下候、左様も御座候得ハ、当年上京仕、於吉田表此段委申上、先格之通申立罷帰候由申出候、然ル所若狭守家、両社大宮司之御許狀写、御役所^二有之候由被仰聞、右御許狀写為御見被下、如何様之趣^二候哉^与御尋被成候、私^上申上候^者、先年^六桑原家^上両社大宮司申出、度々爭論有之候、既^二宝曆年中^二而^茂考市正爭論^茂右之通申出候^{之儀}故御座候、若狭守先祖大和秀治謀計^二而^茂両社大宮司之御許狀頂戴仕候所、私先祖左衛門太夫治重上京仕、於吉田表、桑原大和謀計之段委申上候^二付、桑原秀治^江被下候両社大宮司之御許狀取上候様相成、其段桑

原江申達候得者、〔和州、神戶市兵庫区和田崎〕和州和田御崎^二而難風之節海江沈メ候由申聞候、若又差出候得者^一何時^二而茂私家の取上可申段申上候証拠書付被成

御覽候ハ、持参可仕旨申上翌廿四日、塩屋御氏・湯御氏・金山氏^{〔金山船越〕}・吉田表御役人中等之古書掛御目候得者、ケ様之慥成書付有之候上者、若狭

守申分、甚不宜候、右体之儀於吉田表申出候存寄^二有之候得^一決^二而若狭守上京差止メ不申候^一而者不相成儀^与、此段御役人中^{江茂}委可申上、其方古

書物役所^江預り可申由被^一仰候得共、^{〔父の意〕}考市正の遺言^二而何方^江も御預ケ不仕候様^二子孫迄申伝候様^二申たる儀^二御座候得者、御預之儀^者御免被下

候様^二相断候、先年宝曆年中^二も差出候扣も御役所^二可有御座^与申上候得者、御承知被下、執筆之人^江御写を御取被成候、定席御証文^者御日記

^二委御座候由被仰聞候、同廿八日若狭守上京仕候趣承之候故、仁兵衛殿^江罷出、若狭守致上京候様^二及承候、先日若狭守の申出候儀^二付、私

江御尋有之候、而社大宮司之儀若狭守^江如何被仰付候^而上京仕候哉、御様子承度段申上候得者、若狭守上京御免仕廻次第出立之由^二候、先達^而

相尋候儀^者若狭守^江申出候儀^者勿論其外^二而茂色々之儀吉田表^江申出ル存寄有之候得^者、上京不相成、其上御呵も有之候、当役所の添簡^二茂若狭

守の如何様之儀申上候共、御執上不被下様^二と申遣候事^二而候、其元氣遣之筋無之儀^与被仰候、申上度儀も御座候得共、左様^二相片付候ハ、先

差控可申段申上、牧村四郎兵衛殿^江罷出、右之趣意相尋候所、御同様之被^二仰聞^二而相済申候、

一、同三辛亥年八月十五日、当月晦日より御奥之御清メ罷出候様被^二仰付候、神祇管領御本所吉田表代々御職掌^一御朱印・御裁許状、只今所持之分、左之通以前御裁許状相知レ不申候、

一、福場左衛門太夫治重

一、同大宮司

福場左京進治次

福場左京進治次

福場左京進治次

福場左京進治次

福場左京進治次

福場左京進治次

福場左京進治次

福場左京進治次

福場左京進治次

福場左京進治次

寛文元辛丑年七月廿五日頂戴之、^{〔六六〕}

一、同大宮司

福場主膳重長

貞享二乙丑年七月十三日頂戴之、^{〔六八五〕}

一、同大宮司

福場信濃治長

宝永七庚寅年九月六日頂戴之、^{〔七一〇〕}

一、同大宮司

福場筑後治家

元文四年七月十一日、^{〔七三九〕}

其後宝曆八年上京仕候而位階仕候、^{〔七五八〕}

位記十月七日・口宣宣奉十月十日

御綸旨頂戴仕、

正六位下

土佐守藤原朝臣治裏

十月七日

一、鷺原一本松社頭八幡宮大宮司

御許状

福場土佐治行

安永二癸巳年五月十五日頂戴之、^{〔七七三〕}

其節、位階仕候、

同年五月廿八日・五月廿九日

位記・口宣 宣奉御綸旨頂戴仕、

正六位下

土佐守藤原朝臣

五月廿八日・五月廿九日

元来、祇園大宮司桑原家之儀^者下社家同様^二正月元旦・八月朔日・九月九日神事^二茂下社家同様^二罷出相勤申候、尤八月御祭礼之節、御祭礼被

仰付候条、御出勤可被成と申遣候、祇園社御祭礼之節^者毎年六月四日、

来ル七日早朝の御来駕可被下候^与申越候、取遣とも古格^二而今以違変不

仕候、

一、寛文五年八月十二日、火災^二而古書・系図・御許状等左衛門太夫治重

御許状^茂上下焼失^二而、文面故障之儀^者無御座候、

私従先祖代々

御領御鎮守神社^并市正共神主職行仕来候神社、左之通

社頭大宮司

福場土佐守

津和野鷺原山

一、荒神社

御勧請之年曆相知レ不申候、鷺原之地主^二而、只今八幡宮之御本社之処^二御座

候由申伝候、只今荒神玉殿^者八幡宮宮尾一本松^二御鎮座時代之御社^与申伝候、

寛文七乙未年十二月八日^二御造宮被

仰付候、

一、宝永八辛卯年、八幡宮末社之古キ御社を玉殿之上座^二被遊候、只今之

御社^二而御座候、其後^茂追々御造宮御座候、安永二癸巳三月御代参平田

宗太夫殿御勤有之御神楽錢百貳拾文被為御備候、

津和野滝之前

一、恒産明神

右御社之儀^者天和二壬戌年、

前^{〔前出、亀井、註視〕}隠岐守茲親公御時代、寺田組千原村^{〔47〕}百姓家大國・恵比寿之御尊像御出現

之由、

右御尊像江戸^江被差遣、

茲親公被遊 御覽、自夫京都^江御上ケ被遊、於御本所吉田表

恒産明神^手被為奉 尊号、縁起^者萩原卿御手跡、棟札^者佐々木万次郎殿手跡^二而

御座候、

一、同年十一月下旬之御下り被遊、其後十二月十一日御目付佐々布与次兵

衛殿立会^二而福場左京進・桑原主計・佐伯采女三人^江鬪取被仰付候所、

左京^江鬪当候^二付、遷宮等被仰付候、御祭礼十二月十九日被仰付候、

一、貞享元甲子五月^三、御額文字輪主子^{〔等〕}二品親王御筆、從

茲親公御神納被遊候、御寄付之田地^者灯明人異国^与申ものへ被下置候由

申伝候、灯明家杯も御普請方々修復等御座候、

毎年四月十八日〆十九日町方氏子中〆祭誼執行仕候、毎年十月六日〆

七日^江勸化祭事仕候、

一、安永二癸巳年三月為御代参平田宗太夫殿御勤有之、御初穂百貳拾文御

神納御座候、

天光山

一、天満宮 鷺原

前^{〔前出、亀井、註視〕}茲親公御建立^二而元禄八乙亥五月廿四日御目付里田三太夫殿^江被召呼候^而、御

同

役片寄与兵衛殿・渡辺兵太夫殿三人被仰渡^者、滝之成就院・町之吉祥院・福

場主膳三人^江鬪取被仰付候^而、同廿五日朝六ツ時^二罷出鬪取仕候所、主膳^江当

り申候、御造宮之儀^者 御公儀〆被仰付候、鬪取之節御列席^二者御郡奉行衆式

人波多野武兵衛殿・平尾吉兵衛殿^二而御座候、

一、同六月廿日〆御普請被仰付、御普請奉行小柴源太兵衛殿・馬場伝左衛

門殿、小頭^者竹井六太夫・斎藤七兵衛^二而御座候、

一、天神尊像^者京都〆七月十九日^二御下り被遊候^而、八幡宮^江須臾御相殿

有之候^而 御普請成就之上、正遷宮被 仰付候、御額^者

東坊城大納言卿・高辻大納言卿御両卿之御調之由、御縁記^{〔縁起〕}

者^{〔前出、公卿〕}正三位菅原長義卿御筆^二而御座候、

一、元文辰年九月廿五日御造宮被 仰付、寺社奉行高山甚左衛門殿^{〔48〕}御

役中^二而御座候、其後追々御修覆御座候、

一、天明^{〔七六三〕}三壬寅年

能登守茲貞公御時代御造宮被仰付、同四年卯二月斧御座候、

隠岐守矩資公御代^二相成、八月十一日朝正遷宮被 仰付候、

一、能登守矩貞公、年始御參觀御往來之節、御參詣^者御代參有之候、

茲資公御入部翌年始^{〔天明三年〕}今年甫御參詣有之候所、当子年御社參相止申候、

一、安永^{〔七七一〕}二癸巳年三月、為御代參大野惣左衛門殿御勤有之、御初穂百式拾

文御神納御座候、御祭礼三月十五日^{〔七七一〕}今十六日執行仕候、

鷺原

一、淡嶋大明神

御勸請之儀^者安永三甲午年

能登守茲貞公御代、紀州賀田浦^{〔前出、龜井茲貞〕}御勸請被遊、翌未年御社御造宮被仰付、正遷

宮同年三月十三日^二被仰付、御細工之御神陶一對奉納被為遊、其外御寄付之

品々御座候、

一、御祭礼三月十三日^二今十四日迄、七月晦日^{〔江〕}今八月朔日^二被仰付候、右御

祭勤春秋兩度^二而、御印判三升被下置候、

一、安永^{〔七七九〕}八己亥年三月廿四日、御社領現米三石御城廻地下^{〔江〕}御預被遊候^而、

右利米三升宛御城廻^二分方仕候、

以上五ヶ所共御社^者御上之^二而御座候、私代々勤仕職^二御座候、

横瀬村

一、八幡宮

右御鎮座年曆相知不申候、横瀬村惣鎮守^二而氏子共^二分每年八月廿日^二今廿一日祭

礼仕、春・夏・冬共^二賽仕來候、

下高野村

一、八幡宮

右御鎮座・勸請相知不申、高野上・下村中鎮守^二而氏子共^二今九月十五日^二今十六

日祭礼執行仕、春・夏・冬、賽仕來候、

市尾村

一、八王子社

右御鎮座年曆相知不申候、御祭礼每年九月十四日^二今十五日^二仕、春・夏・冬^者

賽仕來候、

神田村

一、荒人大明神

右御勸請年曆相知不申候、御祭礼每年九月廿七日執行仕、春・夏・冬賽仕來

候、

鷺原瀬戸

一、石上神社

右御鎮座年曆相知不申候、御祭礼每年九月十四日^二今十五日^二仕、春・夏・冬^者

賽仕來候、

滝ヶ原

一、八幡宮

右御社、七社之内^二御座候、然ル処三浦家^{〔福川村神主〕}今代々相勤來申候、

一、原八幡、御社地^レ知不申候

以上七社之儀^者一本松八幡宮之七社七城之御鎮守之由、於家申伝候、

一本松八幡宮神田之事

一、長州高佐村牛王神田 四反三畝、現米四石二斗

一、高田村・神田村 高五拾七石前、

右之田地、坂崎出羽守殿御代被召上候

中座高崎

一、八王子社

右御勸請年曆委相知不申、高崎・新橋・小坂迄氏子^二而御座候、春賽・秋八月十八日^二今十九日御祭礼執行仕候、安永^二癸巳三月為御代參大野惣左衛門殿御

勤有之候、

中座半牛

一、恵比須社

右御勧請年曆相知不申、御祭礼八月廿三日執行仕、尤中座組今出米貳升、社番専右衛門^与申者^江相渡、彼方^{二而}祭事世話仕候、

野中村

一、河内大明神

右御勧請年曆相知不申、御祭礼九月十六日今十七日執行、春・夏・冬賽仕来候、

市尾組西谷村

一、河内大明神

右御勧請年曆相知不申、御祭礼九月十三日今十四日執行仕、春・夏・冬賽仕来申候、

右九社者 御上御社之外^{三而}市在之神社、其余御城廻組貳百余ヶ所小社祭幣諸社御座候得共、宝曆年中^{〔七五〕〔六四〕}、御改^三付書出シ差上置申候故、此度^者不申上候、

右之通御座候、以上、

寛政四子年^{〔七九〕}

杜家頭大宮司

福場土佐守

片寄角右衛門殿^{〔49〕}

翻刻注

〔1〕『津和野町史』第一卷（一九七〇年八月、津和野町史刊行会、三四七～五九頁）は歿年として一般に流布する建武三年（一二三六）京都討死説を退け、延慶二年（一二三〇）説をとる。なお、『島根県歴史人物事典』（一九九七年十一月、山陰中央新報社、六二八頁）所載の「吉見頼行」の項は前者である。

〔2〕『津和野町史』第一卷（一九七〇年八月、津和野町史刊行会、三四〇～四一・三七九～九五頁）に事績が載る。

〔3〕『津和野町史』第一卷（一九七〇年八月、津和野町史刊行会、五〇〇頁）「強化さ

れた家臣団」で「家老」につぐ「吉見一門」のなかに「吉見信濃守」が含まれるが諱は記されない。また、管見の限り同書に「頼祥」を諱とする者も見えない。

〔4〕『津和野町史』第一卷（一九七〇年八月、津和野町史刊行会、六〇六頁）所載「広頼・元頼・広行略系」。

〔5〕『津和野町史』第一卷（一九七〇年八月、津和野町史刊行会、四九九頁）「吉見家の職制」で「軍奉行」のなかに「吉山伊豆守」が含まれるが、同書引用の「吉見大蔵大輔源正頼家頼衆覚」には管見の限り吉山を名乗る家臣は見えない（四九三～九九頁）。同書所載「広頼・元頼・広行略系」の吉見広長の条には「妾 吉山近江守女」〔法名 利室妙貞〕とある（六〇七頁）。なお、ここに引用された打渡状の写しは『津和野町史』同卷（六九三頁）第三部「Ⅻ鎮守神の勧請と伽藍仏教の発展」の「1 鷲原八幡宮」の「4 社領」にも引用され、そこにも「吉山近江守」と見える。

〔6〕現山口県萩市高佐上・高佐下（旧阿武郡むつみ村）。「高佐」〔角川日本地名大辞典 35 山口県〕（一九八八年十二月、角川書店、五〇九頁）の「〔中世〕」には吉見広頼が高佐郷について宛行状を出していること、鳴滝の妙性院は吉見正頼が女の菩提寺として創建したことが書かれている。

〔7〕『三百藩藩主人名大事典』第四卷（一九八九年八月、新人物往来社、六五頁）。

〔8〕『三百藩藩主人名大事典』第四卷（一九八九年八月、新人物往来社、六六頁）。なお、同書によれば先代亀井茲政の五男で老臣多胡主水真武の養子となっていたが兄たちの早世により父の跡を継いで三代目となったという。

〔9〕鷲原八幡宮の別当（神宮寺か）として頻出。『津和野町史』第一卷（一九七〇年八月、津和野町史刊行会、六九一頁）第三部「Ⅻ鎮守神の勧請と伽藍仏教の発展」の1が鷲原八幡宮で、その第三項「3 鷲原別当・福満寺」には「鷲原八幡の別当寺としての福満寺に関する史料は皆無に近い」とし、その理由のひとつを「元和八年（二六二）老臣多胡主水在職中に、福満寺を幸栄寺と改めたことによるかも知れない」と書く。また、その所在地として同書には「津和野城下古絵図などには、八幡宮御旅所と竝んで幸栄寺がある」という。

〔10〕寺社奉行（町奉行兼帯）。『津和野町史』第三卷（一九八九年二月、津和野町史刊行会、三〇八頁）の「第三部 VI 町方支配」に表「町奉行・町年寄、任免表」があり、正徳五年（一一一五）十月十五日に任命、在任は「摘要」欄に「十九年」とあり、次の高山甚左衛門が享保十八年（一七三三）七月二十三日就任となっているので、足掛け十九年で整合性がある。

〔11〕『島根県の地名鑑』第10次改訂版 平成29年4月1日現在（二〇一八年三月、島根県地域振興都市町村課、一八五頁）によれば津和野町部栄（ぶさか）に旧畑迫村大字部栄に上横瀬・下横瀬がある。

〔12〕『島根県の地名鑑』第10次改訂版 平成29年4月1日現在（二〇一八年三月、島

根県地域振興部市町村課、一八五頁）によれば津和野町内美（ないみ）に旧畑迫村大字内美に上高野・下高野がある。

- [13] 『島根県の地名鑑 第10次改訂版 平成29年4月1日現在』（二〇一八年三月、島根県地域振興部市町村課、一八五頁）によれば津和野町部栄（ぶさか）に旧畑迫村大字部栄に市尾（いちのう）がある。

- [14] 『島根県の地名鑑 第10次改訂版 平成29年4月1日現在』（二〇一八年三月、島根県地域振興部市町村課、一八九頁）によれば吉賀町に柿木村大字福川がある。

- [15] 『島根県の地名鑑 第10次改訂版 平成29年4月1日現在』（二〇一八年三月、島根県地域振興部市町村課、一八四頁）によれば津和野町宇高峯になる旧高峯村は神田村ほか四村からなった。

- [16] 『島根県の地名鑑 第10次改訂版 平成29年4月1日現在』（二〇一八年三月、島根県地域振興部市町村課、一八五頁）によれば津和野町鷺原に旧津和野町大字鷺原に瀬戸がある。

- [17] 前掲注6「高佐」『角川日本地名大辞典35山口県』によれば長門国阿武郡高佐郷は近世には萩藩領であり、このあと書かれるように杜領は坂崎直盛の入部後、「御取上」になったというのも、坂崎家の領内ではなかったことも一因かもしれない。

- [18] 『島根県の地名鑑 第10次改訂版 平成29年4月1日現在』（二〇一八年三月、島根県地域振興部市町村課、一八五頁）によれば津和野町高峯に旧畑迫村大字高峯に高田がある。

- [19] 『三百藩藩主人名大事典』第四卷（一九八九年八月、新人物往来社、六四頁）。宇喜多秀家の叔父で後見もつとめた老臣宇喜多忠家の子。関ヶ原合戦の戦功により津和野城三万石を新封され初代藩主となった。大坂夏の陣で救った千姫を家康から妻としてもらえろと思っていたのが裏切られ、攫おうとしたのが発覚して殺されたとも自害したとも言われる。坂崎家は改易となり、亀井政矩が因幡鹿野城から転封した。

- [20] 『三百藩藩主人名大事典』第五卷（一九八八年十二月、新人物往来社、四一〇頁）。

- [21] 『公卿人名大辞典』（一九九四年七月、日外アソシエーツ）によれば萩原員従（はぎわらかずつぐ）は非参議錦小路頼直の三男で明暦三年（一六五七）卜部家系吉田家から分家した萩原兼従（豊国社祠官）の養子となり、名を信康から員従と改める。同年、元服して左衛門佐に任じられる。ただし、同書は、生家錦小路家の歴代の記述をはじめ一部に混乱が見られるが、員従に関しては概ね正確なようである。

- [22] 『国書人名辞典』第二卷（一九九五年五月、岩波書店、三五二頁）によれば「宇煥甫・行。通称、万次（二）郎」といい、江戸のひと、幕府儒官で、門弟として「津和野藩士後藤仲竜ら」とあるので津和野のかかわりも認められる。

- [23] 輪王寺第五六世、宮門跡第二世で後西天皇の第五皇子の天真法親王の初名が守全。

『聖地日光の至宝展』（二〇〇〇年、NHKプロモーション）所載の《書「円頓」に捺された印は「守全」と読める（二三四頁）。同作品解説によれば「延宝元年（二六七三）に比叡山の滋賀院で得度して、「日光新宮」（輪王寺の法嗣）となり、同八年、守澄法親王が没したのを受けて関東に下って輪王寺宮となった」という（二二二頁）。『日光山と徳川四〇〇年の文化』（二〇〇四年四月、日光山輪王寺）所載の「法華経普門品」解説によれば「書画を能くし、優れた作品を多く残すといふ（一一四頁）。

- [24] 『三百藩藩主人名大事典』第五卷（一九八八年十二月、新人物往来社、四〇八・九頁）。

- [25] 『島根県の地名鑑 第10次改訂版 平成29年4月1日現在』（二〇一八年三月、島根県地域振興部市町村課、一八五頁）によれば津和野町中座がある。

- [26] 『島根県の地名鑑 第10次改訂版 平成29年4月1日現在』（二〇一八年三月、島根県地域振興部市町村課、一八五頁）によれば津和野町内美（ないみ）に旧畑迫村大字内美に野中がある。

- [27] 『島根県の地名鑑 第10次改訂版 平成29年4月1日現在』（二〇一八年三月、島根県地域振興部市町村課、一八五頁）によれば津和野町中川に旧木部村大字中川に下山がある。

- [28] 『島根県の地名鑑 第10次改訂版 平成29年4月1日現在』（二〇一八年三月、島根県地域振興部市町村課、一八五頁）によれば津和野町邑輝（むらき）に旧畑迫村大字邑輝に西谷がある。

- [29] 寺社奉行（町奉行兼帯）。前掲注10『津和野町史』第三卷所載の表「町奉行・町年寄、任免表」によれば元文四年（一七三九）七月二十三日から二十一年間在任、次の牧村四郎治が宝暦九年（一七五九）閏七月二十八日就任である。

- [30] 『津和野町史』第一卷（一九七〇年八月、津和野町史刊行会、四八一頁）。

- [31] 前掲注19。

- [32] 『津和野町史』第一卷（一九七〇年八月、津和野町史刊行会、七一四～一六頁）第三部「皿鎮守神の勧請と伽藍仏教の発展」の3が祇園社で、同社社伝には享禄九年（二五二八）九月、吉見正頼が再勧請と伝えるものの正頼の家督は天文九年（二五四〇）、父頼興在世中で家督は兄隆頼であると書く。ここに広頼とあるのはもちろん誤り。

- [33] 現弥栄神社。

- [34] 吉田神社神官の家で、公卿、卜部氏。室町時代中期の非参議兼俱が足利將軍家に接近して吉田神社の地位を向上し、神・仏・儒を統合した吉田神道を大成した（『京都市姓氏歴史人物大辞典（角川姓氏歴史人物大辞典26）』（一九九七年九月、角川書店、七一四頁）および井上智勝『吉田神道の四〇〇年』（二〇一三年一月、講談社）

など。

[35] 塩冶内匠助・湯木工允はともに重臣たちである。『津和野町史』第二卷（一九七六年六月、津和野町史刊行会、二八五・三〇二～〇七頁）には、元和三年（一六一七）亀井政矩の津和野入城に付き従ってきた家臣たちで、元和五年（一六一九）のちに絃政となる大力がわずか三歳で跡を継いだ後、藩政を見ていた重臣である。元和七年（一六二二）幕府が津和野藩に示した江戸詰重臣等勤務心得では「年寄」四人に次ぐ「奉行」三人のうちに名がある。

[36] 不明。紹益の名で同時代の人物には、本阿弥光悦の甥光益の子で、豪商で文化人の佐野紹由（灰屋）の養子となった佐野紹益（一六一〇～九一）がいるが、金山ではない（『京都市姓氏歴史人物大辞典（角川姓氏歴史人物大辞典26）』一九九七年九月、角川書店、三四五頁）。

[37] 吉田神社の社家に鈴鹿家がある。『京都市姓氏歴史人物大辞典（角川姓氏歴史人物大辞典26）』（一九九七年九月、角川書店、三八七頁）には「吉田神楽岡（左京区）の吉田神社の社家を務める鈴鹿家がある。同社預卜部吉田氏の家老を務めた。〔略〕のち吉田神道の管領長上家による神社・神職支配の庶務を行った」とある。

[38] 『三百藩藩主人名大辞典』第四卷（一九八九年八月、新人物往来社、六六頁）。なお、同書によれば先代亀井絃政の五男で老臣多胡主水真武の養子となっていたが兄たちの早世により父の跡を継いで三代目となったという。

[39] 国立公文書館蔵（内閣文庫）『大外記師資記』（古008-027）第三冊の宝暦七年四月二十一日条に次の記述がある。

廿一日 壬午 大雨下、入梅

〔略〕

一、入来、宣旨頂戴為礼

石見国足鹿郡祇園社大宮司

桑原若狭守

太刀 一腰

馬代 百正持参、吉田家副使口上有之、如例、

ちなみに『大外記師資記』の筆者押小路師資は宣旨などの発給に関わる実務官人押小路家の当主であり、六月の叙任に対する礼として、吉田家の副使を伴い、押小路家を訪れたものである。

[40] 前掲注39『大外記師資記』第四冊の宝暦八年十月十三日条に次の記述がある。

十三日 丙寅 晴

一、今日辰刻、頭弁亭、宣旨一卷

正六位下藤原治裏
任上左守事

以家来令付也、

一、入来、宣旨頂戴為礼

石見国足鹿郡

八幡宮大宮司

正六位下土左守藤原治裏

太刀 一腰
馬代 百正

右如例、吉田二位被副使者、令落手、

前掲注39のとおり、宮廷の叙任に関わる文書発給の実務官人で吉田家の使者を伴って礼に訪れたものである。

[41] 前出、寺社奉行（町奉行兼帯）。前掲注10『津和野町史』第三卷所載の表「町奉行・町年寄、任免表」によれば元文四年（一七三九）から宝暦九年（一七五九）まで在任。

[42] 寺社奉行（町奉行兼帯）。前掲注10『津和野町史』第三卷所載の表「町奉行・町年寄、任免表」によれば宝暦九年（一七五九）閏七月二十八日から十六年間、安永三年（一七七四）まで在職。

[43] 現淡嶋神社（和歌山県和歌山市加太）。「淡嶋神社」『日本歴史大事典』第一卷（二〇〇〇年七月、小学館、一一三頁）によれば「近世には淡嶋神は住吉神の妃であったが白帯下の病で加太浦に流されたという説が流布し、婦人病の利益、安産の神として信仰された。淡嶋願人が代参を請け負い淡嶋信仰を広め、全国各地へ勧請もされた」とある。

[44] 前掲注39『大外記師資記』第二十冊の安永二年五月二十九日条・六月三日条に次の記述がある。

廿九日 丁亥 晴

〔略〕

一、今晚頭柳原中納言、社家 宣旨以一通被下知、宣旨四通下知、到来来月二日迄、同日野頭弁へ可附旨也、記于左

安永二年五月廿九日 宣 從五位下藤原宗茂 宣任若狭守

同 年同月 同日 同 源 義明 宣任長門守

同 同 同 同 同 從六位下藤原治行 宣任土佐守

同 同 同 同 同 從五位下藤原守海 宣任肥後守

〔略〕

六月 小

〔略〕

三日 辛卯 雨

一、社家入来、肥前国松浦郡乙宮大明神神主 美濃守橘祇芳、参河国姫美郡神明神主 肥後守藤原

守海・石見国鹿足郡鷺原八幡宮大宮司 土佐守藤原治行・豊前国中津六所大明神大宮司 若狭守

藤原宗茂・豊前国中津豊日別国魂神社大宮司 長門守源義明等、今度任官二付、宣旨

頂戴為礼金五百正持参、太刀・馬代、人別百正宛也、例之通、吉田家使

添畢、

前掲注39のとおり、宮廷の叙任に関わる文書発給の実務官人で今回は吉田家から持ちこまれたのではなく柳原家からまとめて持ち込まれて発給を命じられ、四日後、例にほかの神職とともに吉田家の使を伴って訪れている。

〔45〕 寺社奉行所へ呼ばれて、仰渡しを行っていたので寺社奉行か。ただし、前掲注10『津和野町史』第三卷所載の表「町奉行・町年寄、任免表」によれば宝暦九年（二七五九）から安永三年（二七七四）まで在職の牧村四郎治がいるが、寛政元年（二七八九）の時点では次々代の「片寄角右エ門」の在職期間となっている。このあと「亡父四郎治殿」とあるので四郎兵衛はその子か。

〔46〕 前掲注42と同様、寺社奉行所へ呼ばれて、仰渡しを行っていたので牧村・日比の二名とも寺社奉行か。ただし、前掲注10『津和野町史』第三卷所載の表「町奉行・町年寄、任免表」によれば、このとき寛政三年（二七九一）から五年まで日比仁兵衛の名があるが、前掲注45のとおり牧村四郎兵衛は四郎治の子かもしれない。

〔47〕 『島根県の地名鑑』第10次改訂版 平成29年4月1日現在（二〇一八年三月、島根県地域振興部市町村課、一八六頁）によれば津和野町寺田に旧小川村大字寺田に下千原・上千原がある。

〔48〕 寺社奉行（町奉行兼帯）。前掲注10『津和野町史』第三卷所載の表「町奉行・町年寄、任免表」によれば享保十八年（一七三三）七月二十三日から四年間在任、次の浅井源之進が元文元年（一七三六）十二月二十八日就任である。

〔49〕 寺社奉行（町奉行兼帯）。前掲注10『津和野町史』第三卷所載の表「町奉行・町年寄、任免表」によれば天明三年（一七八三）十二月二十五日から、次の日比仁兵衛の名が寛政三年（一七九二）の行にあるが、摘要欄に「一二月二五日御免」とあり、これが任免どちらを指すか不明。寛政五年八月には遠藤菅兵衛の任命が記されるので、長ければここまでが在任期間か。